# 空は僕らに微笑んだ

松の慎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

## 注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
空は僕らに微笑んだ

【Ｎコード】
Ｎ１３５８Ｂ

【作者名】
松の慎

【あらすじ】
顔も似てるし双子かもしれない。だけど、ただただ一緒にいたいって思う――――・・・僕らは空にそう願った。

『・・・』
『・・・』

はじめて踏み出した高校生活の第一歩。
お互い顔を合わせて呆然とする。

『えーっあたし?!』
『はっ俺がもう1人?!』
『『ありえないからっ!!!』』

それはもう、声も見事にハモリましたとも。
ドッペルゲンガーかと思いましたよ。

懐かしいなー。
あの日からもう1年半は経つんだよね。
経つんだけど・・・まぁなんてゆーの、精進してないってゆーか・・・
・

「おー5組の双子だー!やっほー!」
「「どもっ」」

相変わらずです。
ええ、そりゃもう。

「なかなか有名だな、俺らも」
「ねー。まぁそりゃこんなに似てたらしょうがないか」
「俺的には楽しいけどな」

「あたしもっ」

と言って、笑い合う。
これがあたしたちの日常。
双子だの兄妹だの言われ続けてはや1年。
なんかもう開き直っちゃってますよ。

だけど、不思議な共通点があるんだ。
うちお父さんしかいないの。小さい頃から。
聖んちも昔からお母さんしかいない。
親は違うと言うけれど、ほんとに双子かもって、自分たち自身でも思ってしまう。

「都ー集計手伝ってくれー」
「えー」
「良いだろー？もう放課後だし暇してんだろ。これは双子の宿命なのだよ」
「じゃあフルーツオレで」
「せこっ」

都（みやこ）と聖（ひじり）。
いつも一緒。
なにするにも一緒。
あたし聖のことすごい好きだし、楽しい奴だし一緒にいて飽きないし。
ほんとに双子だったらほんとに良かったのになーって思う。

「はい、こっちの分終わったよー」
「はやっ！ちょい待ってーもうちょっと」
「はいはい」

席を立って、窓の外を眺めた。
ちょうど真下をカップルが歩いていた。

「聖っ聖っ見て見て恋人ー！」

あたしは窓から乗り出して指差す。
聖はこっちに顔を向けて言った。

「そりゃカップルくらいいるだろーここ学校だし」
「そっけないなぁ」

あたしは少し考える。
そして思い出したかのように言う。

「あたしたちもカップルに見られてるのかなぁ？」
「え？」
「だっていつも一緒にいるじゃない？あーでも顔そっくりだから思われないかな。あたし聖とほんとの兄妹だったら良かったなぁー」

いつものように冗談まじりで笑った。
すると聖はこれまでには見せたことのない顔をする。

「聖？どうかした？」
「・・・俺はお前と双子でいたいって思ったことはないけどね」

怒ったような顔つきで、声低く言った。
そして席を立つ。

「俺集計出してくる。じゃあな」

「えっ」

聖は教室を出て、ピシャンとドアを閉める。
少し呆然とした。
なにが起こったの？
あんな聖、見たことないよ。

――その日から、聖は用がない限りあたしに近づいてこなかった。
あたしが側へ行っても、返事をする程度ですぐにどっかに行ってしまう。

「都たちなんかあったの？ケンカでもした？」
「わかんない・・・」

そんなの、あたしが聞きたいよ。
あたしなんか悪いことした？
それなら謝るよ、謝りたいけど・・・・じゃあどうやったら聞いてもらえるの？
あたしと一緒にいるの、ほんとは嫌だった？
嫌だけど双子って言われてたから仕方なくだったの？

わかんないよ・・・
言ってくんなきゃわかんないよ。

あ、そうだ！
聖と仲良い晃（ひかる）くんなら・・・・！！

「晃くん」
「あー都ちゃん。どーした？」

晃くんが聖と一緒にいないときを見計らって、近づいた。
こうでもしなきゃあたし、ずっとこのままになっちゃう。

「聖・・・なんか言ってた？」
「えっ」

晃くんは少し動揺した素振りをした。
あたしは迷わず言い寄る。

「教えて！あたし・・・耐えられないの。聖がいない生活なんて・・・いや。だからなんで聖があたしを避けるのかを知りたいの」
「・・・都ちゃん、じゃあさ、なんで都ちゃんは聖が側にいなきゃいやなの？」
「え・・・」

そりゃ今までずっと一緒にいたし・・・
聖は大事な友達で・・・

・・・それだけ？
それだけでこんなに寂しい思いをするもんなの？
あたし、聖になにを望んでる？
あたしはただ聖に側にいてほしいだけなの。
隣で笑って・・・一緒に楽しいことやってほしいだけ。

「俺が思うに都ちゃんはまだ自覚してないだけで、たぶん聖と同じ気持ちのはずだよ」
「ど、どういうこと？」
「同じ顔だし、双子って言われるのは仕方ないけど、双子だったら無理だろーなぁ」

双子で無理なこと？
双子じゃなかったら無理じゃないってこと？

「よーく考えてよ」

そう言って、晃くんは席を立った。
あたしは立ちつくしながら考える。

双子だったらだめ・・・
なんだろ、ずっと一緒にいること・・・とか？
そうだよね、双子は結婚できないからいつかは離れる。
双子っていうか兄妹じゃ絶対だめじゃんね。
結婚できない・・・あ、そうか！

「恋・・・」

あたしが聖と一緒にいたいって思うのは
離れて寂しいって思うのは
あたしが聖に恋してるから・・・

『あたし聖とほんとの兄妹だったら良かったなぁー』
『・・・俺はお前と双子でいたいって思ったことはないけどね』

だからあのとき怒ったの？
あたしが双子が良いって言っちゃったから・・・
だから聖はあたしが聖のことなんとも思ってないって勘違いしたんだ。
あたしが悪いんだ・・・

あたしはその足で、聖の元へ向かう。

教室にもいないし、廊下にもいない。
どこだろうと考える。
聖が好きな所・・・ううん、疲れたときとか悩みがあるときに行く場所。

ヘアピンを持って、階段を駆け上がる。
3階上がって、ようやくドアが見える。
そう、屋上へつながるドア。
鍵がかかっているそのドアを、慣れた手つきでこじ開ける。

ドアを開けると、冷たい風が吹き注ぐ。
だけど空は見事に晴れている。

「聖」

柵にもたれかかってる聖を見つけて、隣に行く。

「都か。なに？」

そっけない言葉。
だけど、あたしはひるまずに口を開く。

「あたし、やっぱ双子じゃいやだな」

あたしの言葉に、聖が振り向く。

「顔似てるけど・・・やっぱ聖は聖であたしはあたしだもんね。ごめんね、この前あんなこと言っちゃって」
「都」

久しぶりに、聖があたしの目を見る。

「都、好きだ」

あたしは目を見開く。
そしておそるおそる言う。

「あたしたち・・・顔似てるのに？」
「運命の双子だからな」
「周りから変に思われるかもしれないのに・・・？」
「あー思われるだろうな。禁断の愛だかなんだかとか」
「もしほんとの双子だったら・・・」
「それでも良いよ」

震えるあたしの手を握って、聖は笑って言った。

「誰からどう思われても俺の都に対する思いは変わらない」

その言葉はあたしの戸惑いの心を消し去る。
あたしは唾を飲んで、拳を握りしめる。
ぐっと力を入れて、言う。

「あたしも聖が好き・・・」

一生ずっと双子のままなんていや。
周りからなんて思われようとも、別に構わない。

あたしはただ側にいたい、それだけ。
聖もそう思ってくれていた。
だから、それ以上もうなにも望むものはないの。

そして、あたしたちは屋上を出て教室へ戻る。
その手は、ずっと握りあっているまま。

「おーどこ行ってたんだ？双子～」
「まったく仲の良い奴らだー」

もうすでに授業が始まっていた。
先生ともども、笑って言ってる。

聖はあたしの手を引いて、教壇へ立つ。

「俺らをもう双子なんて言わせないぜ」
「は？聖なに言ってんだよー」
「付き合うことになった。だから双子じゃなくて言うんなら恋人にしとけ！」
「「「えーっ？！」」」

これからみんなになんて言われるんだろう。
だけど、別に良いよね。
仮に双子だとしても、それでも好きになっちゃったものは仕方ない。
明日が明日の風が吹く、ってね。

「よろしくねっ、お兄ちゃん！」
「お兄っ・・・」
「冗談だよー」

ずっと、ずっと永遠でありますように。
一緒にいられますように。

空に願った。

fin

## ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

---

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1358b/

---

空は僕らに微笑んだ

2010年12月31日04時26分発行